

延期される六の君の結婚

— 葵の上の面影 —

— 「ついでのまま」の縁談

三村友希

斜陽の八の宮家の姉妹たちを女主人公に展開する宇治十帖の物語において、本来ならば薫や匂宮の恋の相手を演じる女主人公になりえたかもしれないのに、脇役的存在に甘んじる女たちがいる。今上帝鍾愛の内親王として薫に降嫁する女二の宮、中の君を不憫に思いながらも匂宮が渋々結婚する夕霧六の君である。彼女たちの結婚は、というより、薫と匂宮のこの政略結婚は、決して別個に成立するのではなく、懸案事項として連動して語られていくことになる。そして、二つの縁談は、予定調和的であるにも関わらず、なかなか決定には至らない。縁談の成立、結婚の成就よりも、延期されることじたいが物語を生成していくような物語構造が、二人の女主人公候補を翻弄するのである。

宿木巻冒頭、女二の宮は唐突に登場する。これ以降、薫と女二の宮、匂宮と六の君の縁談は連動して語られている。母藤壺の女御が女二の宮の裳着を待たずに急逝し、後見のない女二の宮を案じる今上帝が薫との縁組をほのめかしたとき、夕霧はひどく動揺する。

かかることを、右大臣ほの聞きたまひて、六の君はさりともこの君にこそは、しぶしぶなりとも、まめやかに恨み寄らばつひには、え否びはてじ、と思しつるを、思ひの外のこと出で来ぬべかなりとねたく思されければ、兵部卿宮、はた、わざとにはあらねど、をりをりにつけつつをかしきさまに聞こえたまふことなど絶えざりければ、さばれ、な

ほざりのすきにはありとも、さるべきにて御心とまるやうもなかなからん、水漏るまじく思ひ定めんとても、なほなほしき際に下らん、はた、いと人わろく飽かぬ心地すべし、など思しなりにたり。
(宿木⑤三八〇)

つまり、夕霧自慢の娘六の君の婚は、はじめは薫が第一候補者であったという。たとえ薫が消極的であったとしても、いつかは受けてもらえる縁談だと油断していた隙に、思いがけず女二の宮降嫁の話が持ち上がったってしまった。ならば、匂宮しかないという。

女二の宮には、際立った個性も劇的な運命も与えられることがなく、浮舟の悲劇の外郭的要因であるにすぎない(注1)。近年の研究では、これまで見過ごされてきた宇治十帖の政治問題に関心が集まり、女二の宮と薫の結婚にも、今上帝の政治的思惑が読み取られている。無論、六の君の結婚の背景にも、明石の中宮や夕霧の目論見がある。六の君もまた脇役的立場を抜け出すことはないが、宇治の姉妹たちの結婚問題を左右せずにおかないのである。六の君の結婚をめぐる展開に軸を置いてみたとき、宇治十帖の物語世界はいかに解体されるのだろうか。

夕霧の訴えを受けた明石の中宮も匂宮に饒舌に語りかけ、親王としてのあるべき姿を説いている。このとき、女二の宮は十四歳、六の君は二十歳ほど。薄幸の藤壺の女御の死が、薫や匂宮を取り巻くしがらみを顕在化させた。藤壺の女御が死去した夏には、宇治ではすでに八の宮は崩じており、薫は大君・中の君を垣間見ている。晩秋には八の宮の一周忌をかがいがいしく準備しながら、薫を頑なに拒む大君に恋慕の情を訴えていたところである。実はその一方で、生活拠点である都では、薫と今上帝鍾愛の内親王との間に縁談が起こっていた。椎本・総角巻と宿木巻で同時進行する物語を読み合わせなければ、この輻輳的な状況は把握できない。更に、この転換点は紅梅巻とも時を同じくしている。

例ならず言つづけて、あるべかしく聞こえさせたまふを、わが御心にも、もとよりもて離れて、はた、思さぬことなれば、あながちにはなどてかはあるまじきさまにも聞こえさせたまはん。ただ、いと事うるはしげなるあたりにとり籠められて、心やすくならひたまへるありさまのところせからんことをなま苦しく思すにもものうきなれど、げに、この大臣にあまり怨ぜられはてんもあいなからんなど、やうやう思し弱りにたるなるべし。あだなる御心なれば、か

の按察使大納言の紅梅の御方をもなほ思し絶えず、花紅葉につけてものたまひわたりつつ、いづれをもゆかしくは思しけり。
(宿木⑤三八一)

これは、紅梅卷に「いといたう色めきたまうて、通ひたまふ忍び所多く、八の宮の姫君にも、御心ざし浅からで、いとしげう参で歩きたまふ」(⑤五五)とあった、八の宮の名がはじめて示された箇所符合する。匂宮と中の君の結婚を大君に認めさせようと薫が奔走していたときに、匂宮は六の君との縁談を勧められていただけでなく、宮の御方を盛んに口説いていたことになる。この匂宮の多情ぶりをめぐっては、宇治の物語の始発以前に不遇な宮腹の姫君に惹かれる匂宮を描いておくことの重要性、宇治の姫君への思慕に妥当性を与える効果が指摘されている(注2)。

さて、翌春の中の君の上京を見届けた薫が、中の君に対する未練を断ち切るのように女二の宮降嫁を承諾したのは、藤壺の女御の喪が明けた翌年の夏のことである。薫も匂宮も気のすすまない縁談を受け入れ、都世界の秩序の中に回歸していくが、その経緯をめぐる語りの方法は案外に複雑である。宿木卷より以前の、六の君に関する記述を振り返ってみる。

①大殿の御むすめは、いとあまたものしたまふ。大姫君は春宮に参りたまひて、またきしろふ人なきさまにてさぶらひたまふ。その次々、なほみなついでのままにこそはと世の人も思ひきこえ、后の宮ものたまはずれど、この兵部卿宮はさしも思したらず、わが御心より起こらざらむことなどは、すさまじく思しぬべき御気色なめり。大臣も、何かはやうのものと、さのみうるはしうはと、しづめたまへど、またさる気色あらむをばもて離れてもあるまじうおもむけて、いといたうかしづききこえたまふ。六の君なん、そのころの、すこし我はと思ひのほりたまへる親王たち、上達部の御心尽くすくさはひにもものしたまひける。
(匂兵部卿⑤十九)

②やむごとなきよりも、典侍腹の六の君とか、いとすぐれてをかしげに、心ばへなども足らひて生ひ出でたまふを、世のおぼえのおとしめざまなるべきしもかくあたらしきを心苦しう思して、一条宮の、さるあつかひぐさ持たまへらでさうざうしきに、迎へ取りて奉りたまへり。わざとはなくて、この人々に見せそめてば、かならず心とどめたまひてん、人のありさまをも知る人は、ことにこそあるべけれ、など思して、いといつくしくはもてなしたまはず、いまめかし

くをかききやうにも好みさせて、人の心つけんたより多くつくりなしたまふ。

(匂兵部卿⑤三二)

第三部の始発で、六の君は話題にのぼっていた。髭黒亡き後、明石の中宮の兄夕霧右大臣は、並ぶ者のない最高権力者である。多産の夕霧は、明石の中宮と連携した後宮政策にも抜かりはない。夕霧の長女の大姫君は東宮に入内し、次女の中姫君は「次の坊がねにて、いとおぼえことに重々し」(匂兵部卿⑤十八)き二の宮に嫁いでいるという。その「ついでのままに」、匂宮も夕霧の三番目の姫君と結婚するであろうと周囲も思い、母明石の中宮も言っているが、匂宮本人は乗り気ではないとある。まだ余裕のある夕霧も、自由恋愛を志向する匂宮に無理強いするような措置を講じてはいない。そして、夕霧の姫君たちの中でもとりわけ注目を集めているのが藤典侍腹の六の君である、と紹介されるのである。

夕霧は、期待の六の君を落葉の宮の養女にして、六条院で養育させていた。箱入り娘にしすぎないように、適度に貴公子たちの関心を煽りながら。夕霧が復興させた新六条院で、六の君を「くさはひ」とした婿選びの物語が始まるかのような設定にちがいない。非の打ちどころのない六の君ならば、「この人々」すなわち薫や匂宮が気に入らないはずはない、と夕霧には自信があったようなのだ。

宇治の物語は、今上帝が長く在位しており、政治的には極めて安定しているように見える。右大臣夕霧を中心にした政治的安定、兄二の宮が次の東宮候補であるゆえの時間的猶予が与えられ、匂宮は自由奔放な振る舞いを容認されていた。第三皇子の匂宮にやがて立場の可能性が生じてくることを踏まえれば、権力者夕霧と母明石の中宮の張り巡らせた囲いの内側で、匂宮は期間限定の自由を謳歌しているにすぎないのである(注3)。夕霧や明石の中宮が考える匂宮の「ついでのままに」の結婚は、今上帝が「そのついでのままに」(宿木⑤三七七)思案した薫の女二の宮降嫁と呼応して、結局は都世界の既成の論理に回収され、周囲が理想と見る結婚をするほかない二人の立場を象徴している。

権勢家夕霧に誤算があったとすれば、匂宮が宇治の中宮の君に夢中になってしまったことである。匂宮には、周囲がお膳立てする縁談には興味がなかった。そうした匂宮の色好みぶりの証明が、六の君に対する無関心であり、宮の御方への執心である。宮の御方について、六の君あるいは女二の宮の縁談が始動する宿木巻でもう一度だけ語られるのは、前掲の通

りである。中の君が二条院に転居し、出産してその立場が保証されるまで、宮の御方に対する匂宮の関心は、再度語られることがなかった。その反面で、六の君の縁談については繰り返し触れられて、宇治の外側から都世界の秩序や論理をまとわりつかせつつ、宇治の物語を意味づけ、相対化するのである。その意味で、六の君の存在は極めて機能的である。

二 縁談成立までの紆余曲折

匂宮の宇治への傾斜は、母明石の中宮や夕霧の過保護・管理からの反発であり、逃避であった。それでも、宇治にも夕霧や明石の中宮の監視の目は否応なく届いている。初瀬詣でからの帰途、八の宮邸の対岸にある夕霧の山荘に中宿りをした際には、薫をはじめ、夕霧の子息の「右大弁、侍従宰相、権中将、頭少将、蔵人兵衛佐などみな」（椎本⑤一七〇）がこぞって迎え出た。匂宮をめぐる包囲網は明石の中宮の情報ネットワークでもあり、明石の中宮は匂宮の行動を監視、掌握し、幾度となく諫言して規制しようとする（注4）。新婚三日目の婚儀の晩には、明石の中宮は早速、匂宮をつかまえて叱責して、宇治が気がかりで落ち着かない匂宮を相手にその口ぶりはいっぴになく厳しい。夜歩きを戒め、「上もうしろめたげに思しのたまふ」のだからと「里住みがちにおはしますを諫め」（総角⑤二七六）ている。

匂宮も、夕霧の機嫌を損ねるわけにゆかぬと認識しているようだ（注5）。生真面目な夕霧を苦手とする匂宮は、夕霧が今上帝や明石の中宮に自分の陰口を叩くのも気にいらぬ。匂宮は次の東宮候補の筆頭なのであり、「もし世の中移りて、帝、後の思しおきつるままにもおはしますさば」、中の君を「人より高ささまにこそなさま」（総角⑤二九〇）と思うのである。六の君との縁談問題が匂宮と中の君の関係を外側から意味づけるのは、宇治十帖の語りの方法なのである。中の君の立場を位置づける尺度は、都世界の既成の秩序である。今上帝も明石の中宮も、夕霧も、匂宮包囲網を狭めてくる。宮は、たち返り、例のやうに忍びてと出で立ちたまひけるを、内裏に、「かかる御忍び事により、山里の御歩きもゆくりかに思したつなりけり。軽々しき御ありさまと、世人も下に譏り申すなり」と、衛門督の漏らし申したまひければ、

中宮も聞こしめし嘆き、上もいとゆるさぬ御気色にて、「おほかた心にまかせたまへる御里住みのあしきなり」と、きびしきことも出でて来て、内裏につとさぶらはせたまつりたまふ。左の大殿の六の君をうけひかず思したることなれど、おしたちて参らせたまふべくみな定めらる。

(総角⑤三〇一〜三〇二)

禁足令の発動である。匂宮の世評を気にかける今上帝の不安と憤慨は、頂点に達している。それも、夕霧の子息「衛門督」の告げ口があつたからであつた。怒り心頭の今上帝も明石の中宮も、もはや匂宮を甘やかしてはいられずに、匂宮が拒絶し続けてきた六の君との婚約を強引に決めてしまふのである。

この段階では、六の君や夕霧が体现する権力や、貴族的、世俗的な価値観や論理といったものは、中の君を傷つけ、大君を絶望の淵に陥れることになる。いったいどのような姫君なのか、六の君の実態はまるでわからず、実は都で起こつていたはずの薫と女二の宮の縁談を隠蔽したままで語られる大君の結婚拒否と死の物語を側面から支えていよう。総角巻では薫の結婚問題は意識されておらず、宿木巻の記述とは異なる経緯で、匂宮と六の君の縁談が整いつつある。一応の縁談成立までの過程で、匂宮を取り巻く事情がしだいに意味を帯びてくる。

宮は、まして、御心にかからぬをりなく、恋しくうしろめたしと思す。「御心につきて思す人あらば、ここに参らせ

て、例ざまにのどやかにもてなしたまへ。筋ことに思ひきこえたまへるに、軽びたるやうに人の聞こゆべかめるも、いとなむ口惜しき」と、大宮は明け暮れ聞こえたまふ。

(総角⑤三〇二〜三〇三)

次期東宮に期待される匂宮なればこそ、度重なる明石の中宮の説得にも厳しさが増し、六の君と結婚した上で中の君を召人として側に置けばよいとまで言う。この過保護でお節介な助言は、「なほさるのどやかなる御後見をまうけたまひて、そのほかに尋ねまほしく思さるる人あらば参らせて、重々しくもてなしたまへ」(総角⑤三二四〜三二五)と繰り返されることになる。

一方、病床の大君に打撃を与えたのは、薫の従者が親しい若い女房を相手にした、匂宮についての「左の大殿の姫君をあはせたまつりたまふべかなる、女方は年ごとの御本意なれば、思しとどこほることなくて、年の内にありぬべかなり」

(総角⑤三〇九) という噂話であった。匂宮と六の君の縁談成立を知ってしまった大君は、これで中の君は棄てられてしまふのだと思ひ込み、薫を拒み続けて死んでいく。しかし、相変わらず、六の君は見えざる脅威にすぎない。大君の男性不信を増幅させて死に向かわせればよいだけなのだから、幻想の六の君でいいのである。

大君が死に追いやられたことで、思ひがけず、匂宮は明石の中宮から中の君引き取りの許しを得られることになった。六の君という虚像の本領発揮は、ここからである。

かの宮よりは、「なほかう参り来るともいと難きを、思ひわびて、近う渡いたてまつるべきことをなむ、たばかり出でたる」と聞こえたまへり。後の宮聞こしめしつけて、中納言もかくおろかならず思ひほれてゐたなるは、げにおしなべて思ひがたうこそは誰も思さるらめと心苦しがりたまひて、二条院の西の対に渡いたまひて、時々も通ひたまふべく、忍びて聞こえたまひければ、女一の宮の御方にこと寄せて思しなるにやと思しながら、おぼつかなるまじきはうれしくて、のたまふなりけり。

(総角⑤三四一)

匂宮がひそかに中の君を迎え取る計画を進めていたところ、それをいち早く耳にした明石の中宮が、寛容にも認可を与えたのである。翌春の二月、中の君はひとり宇治を出る。「世人」も中の君の存在を認めた(早蕨⑤三六四)。その煽りを受けざるをえないのが、六の君である。

右の大殿は、六の君を宮に奉りたまはんこと、この月にと思し定めたりけるに、かく思ひの外の人を、このほどより前にと思し顔にかしづきすゑたまひて、離れおはすれば、いとものしげに思したりと聞きたまふも、いとほしければ、御文は時々奉りたまふ。御裳着のこと、世に響きていそぎたまへるを、延べたまはんも人笑へなるべければ、二十日あまりに着せたてまつりたまふ。

(宿木⑤三六五〜三六六)

噂されていた年内の婚儀が実現しなかったばかりか、中の君が上京した二月、夕霧は匂宮をついに婿取ろうと予定していたようなのに、当代一の権勢家が「思ひの外の人」に憚って婚儀を延期するはめになったという。夕霧の屈辱は、相当なものであったにちがいない。ならば薫はどうかと打診してみるものの、大君を喪ったばかりの薫が承諾するはずもない

(早蕨⑤三六六)。中の君が都に上り、六の君が裳着を迎えた二月の前年には、すでに女二の宮と薫の縁談が内々に検討されてもいたはずである。夕霧はだからこそ、何としても六の君を匂宮にと懸命になっていたのであった(宿木⑤三八〇)。

三 可憐な女郎花／葵の上の面影

早蕨巻の段階では、夕霧は薫の縁談を知らなかったかのように、匂宮がだめならば薫にと考えている。総角・早蕨巻の時点では、まだ女二の宮に関わる構想はなかったのかもしれない(注6)。宿木巻になると、二組の結婚が連動して決定されたと定位し直されるのである。匂宮と六の君の縁組が成立したころ、薫も母藤壺の女御の喪が明けた女二の宮の降嫁を内諾し、二組の結婚はほぼ同時に正式決定する。藤壺の女御の死は薫二十四歳の夏ごろであったから、それはその一年後、薫二十五歳の夏。女二の宮の裳着は、更に翌年の二月(中の君上京から一年後)まで持ち越される。藤壺の女御の喪の期間、準備されていた女二の宮の裳着は延期され、薫の結婚問題は水面下で交渉されていた形だ。

先述したように、焦燥感に駆られた夕霧はひとまず、六の君の「人笑へ」を避けるために裳着の式だけを決行した。親王としてのあるべき姿を説く明石の中宮の熱心な忠告もあって(宿木⑤三八〇〜三八一)、匂宮もようやく六の君との婚約を承知する。そうなると、中の君の不安は計り知れない。

右大殿には急ぎたちて、八月ばかりにと聞こえたまへり。二条院の対の御方には、聞きたまふに、さればよ、いかでかは、数ならぬありさまなめれば、かならず人笑へにうきこと出で来んものぞとは、思ふ思ふ過ぐしつる世ぞかし、あだなる御心と聞きわたりしを、

(宿木⑤三八三)

元々「人笑へ」を怖れていたのは、六の君側に比べて弱者的立場にある中の君の側であったはずなのである。匂宮と結ばれた中の君の身の上を、大君は「人笑へ」なことにならないかと繰り返し案じていた(総角⑤二八九・二九九・三〇一)。その後、後見もなく、匂宮の愛情だけにすぎる中の君の存在が、逆に夕霧・六の君側に「人笑へ」を危惧させ、狼狽させ

たのである。しかし、いざ匂宮と六の君の婚儀が間近になると、「人笑へ」意識が再び中の君側のものに戻るのも自然の流れであった。

ところが、婚儀当日も夕霧は待たされる。折からの悪阻で気分がわるい中の君を気づかない、匂宮はなかなか六条院にやっ
て来ない。待ち焦がれる夕霧は「思す人持たまへればと心やましけれど、今宵過ぎんも人笑へなるべければ」(宿木⑤四〇一)、息子の頭中将を使い遣って来訪を促すのであった。

これ以後、双方ともに「人笑へ」の心配を抱くことはない。匂宮の中の君に対する誠意に変わりはなかったし、六の君にも魅了される。一方、内親王降嫁という破格の厚遇を受けた薫の婿ぶりも、なかなか様になっていた。匂宮も薫も、抵抗しつつも安易で現実的な政略結婚に妥協し、母明石の中宮や女三の宮の膝下に戻るようになる。再びこの均衡が破られるためには、浮舟の登場を待たねばならない。六の君の結婚問題は、大君を追いつめ、上京後の中の君に試練を与えて薫との接近を許し、浮舟登場を間接的に促す切り札となる機能的役割を負っているのである。

では、正面から語られることのない六の君は、どのように造型されているのであろうか。十分に成熟した六の君は、「人のほど、ささやかにあえかになどはあらで、よきほどになりあひたる心地」(宿木⑤四〇五)で「大ききよきほどなる人」(宿木⑤四一九)であった。気位の高いところもなく、その容姿も「すべて何ごとも足らひて、容貌よき人と言はむに飽かぬところなし」(宿木⑤四一九)と最大級に評価される。恥じらいもあり、接して手応えのある才覚も備えていた。程良い背丈と体格がいかにも権門の姫君らしくて過不足ないことは再び確認され、匂宮が魅了された新妻六の君が「盛り」の容貌であることは、当該例の他でもしきりに強調されるところである。

二十に一つ二つぞあまりたまへりける。いはけなきほどならねば、片なりに飽かぬところなく、あざやかに盛りの花と見えたまへり。限りなくもてかしづきたまへるに、かたほならず。

(宿木⑤四一九〜四二〇)

中の君と六の君の優劣が微妙な序列構造は、六の君の大輪の花のように咲き誇る美に比して、匂宮が中の君の個性を「やはらかに愛敬づきらうたき」(宿木⑤四二〇)と感じていることから明らかである。中の君に対して繰り返し用いられ

る鍵語「らうたし」「らうたげ」は、六の君の結婚後にしばしば見える。

- ① らうたげなるありさまを見棄てて出づべき心地もせず、いとほしければ (宿木⑤四〇一〜四〇二)
- ② むげに世のことわりを知りたまはむこそ、らうたきものからわりなけれ (宿木⑤四〇九)
- ③ らうたげに心苦しきさまのしたまへれば、えも恨みはてたまはず (宿木⑤四三六)
- ④ いと見まほしくらうたげなり (宿木⑤四六五〜四六六)
- ⑤ 扇を紛らはしておはする心の中も、らうたく推しはからるれど (宿木⑤四六六)
- ⑥ いとどらうたげなる御けはひなり (浮舟⑤一三九)

これらは、匂宮の視線から形象された中の君である。健気に振る舞う中の君はいっそう可憐に魅力的で、匂宮は何とかしてかばってあげたいと思う。包容力のある思いやりは、豪華にしつらえられた部屋で父夕霧や養母落葉の宮、多くの兄弟にかしづかれる六の君に対比されたときにこそ、孤独な中の君に対して強く抱かれるのである。中の君の「らうたし」「らうたげ」に対して、夕霧・六の君周辺には「うるはし」「うるはしげ」が頻出される。

- ① 大臣も、何かは、やうのものと、さのみうるはしうはと、しづめたまへど (匂兵部卿⑤十九)
- ② 三条殿と、夜ごとに十五日づつ、うるはしう通ひ住みたまひける (匂兵部卿⑤二〇)
- ③ 宰相の御兄の衛門督、ことごとしき隨身ひき連れてうるはしきさまして参りたまへり (総角⑤二九四)
- ④ ただ、いと事うるはしげなるあたりにとり籠められて (宿木⑤三八一)
- ⑤ 御台八つ、例の御皿などうるはしげにきよらにて (宿木⑤四一四)
- ⑥ 例のうるはしきことは目馴れて思さるべかめれば (宿木⑤四二〇)
- ⑦ 何ごともいとうるはしくことごとしきまで盛りなる人の御装ひ (宿木⑤四三七)
- ⑧ ことごとしくうるはしくて、例ならぬ御事のさまもおどろきまどひたまふ所にては (蜻蛉⑥二二四)
- ⑨ 「それは、容貌もいとうるはしうきよらに、……」 (手習⑥三三九)

夕霧の真面目な態度であったり、六の君の装束やしつらいであったりと夕霧家に「うるはし」「うるはしげ」が繰り返して用いられている。宿木巻に用例が集中するのは、中の君の「らうたし」「らうたげ」の比較対象となっているからである。深窓の姫君である六の君の、立派できちんと整った立ち居振る舞いが象徴される語彙であろう。堅苦しさをともなう「うるはし」「うるはしげ」は必ずしも褒め言葉ではなく、その端正さが負性につながった例としては、葵の上が想起される。若い光源氏には、葵の上の「あまりうるはしき御ありさまの、とげがたく恥づかしげに思ひしづまりたまへる」（宿木①九一）「絵に描きたるものの姫君のやうにしすゑられて、うちみじろきたまふこともかたく、うるはしうてもものしたまふ」（若紫①二二六）様子が物足りなかった。葵の上は夕霧の母であり、六の君の祖母である。左大臣家に継承される遺伝的性質を見出すこともできるのである（注7）。葵の上も六の君も、限られた場面にしか登場せず、詠歌もない。六の君の後朝の文は、落葉の宮の代筆であった。

女郎花しをれぞまさる朝露のいかにおきけるなごりなるらん

（宿木⑤四一一）

六の君に和歌を詠む教養がなかったわけではない。「女郎花」は六の君は物思いに沈んでいて書けないという。「継母の宮」（宿木⑤四一〇）は、「なやましげ」（宿木⑤四一一）な六の君の媚態を受動的に男を待つしかない立場のそれとして、句宮の憐憫を求めている（注8）。それが自身の詠歌ですらないところに、六の君の希薄な存在感が浮き彫りになっていく。六の君の「うるはし」「うるはしげ」な美は権力的な威圧感さえ漂わせていたのに、その圧迫感は塗り込められてしまう。六の君を葵の上の二の舞にしてはならないのである。庇われねばならない弱者は中の君のはずであるのに、それを逆転して位置づけようとする演出なのにちがいない。

愛情問題では、六の君は不利である。句宮はすでに、中の君に深い愛情を誓っている。両者の立場は微妙な均衡を保っているが、どちらが弱い立場なのかは観点によって入れ替わって曖昧なのである。そして、それなりに安定した妻の座を得た二人ともが、女主人公の立場を浮舟に譲っていくのは偶然ではあるまい。

四 六の君の結婚における政治的意義

左大臣は、朱雀帝からの入内要請を退けてまで、葵の上を光源氏と結婚させた。右大臣家が目指す外戚政治とは別の将来設計を選択したことになる。しかし、葵の上の死後、母大宮は「この家にさる筋の人出でものしたまはでやむやうあらじと故大臣の思ひたまひて」（少女③三六）いたとして、弘徽殿の女御の入内も熱心に準備したのに、中宮の座を秋好に奪われたことだけは光源氏を恨んでいると告白する。左大臣家の後宮政策の失敗を嘆いた大宮は、生後まもなく母葵の上と死別した夕霧の養育に携わった。桐壺帝の皇妹である大宮は、后腹の内親王として左大臣に降嫁しており、皇族でありつつ藤家でもある二重性を生き、「大宮」と呼称される立場の重要性からも、彼女の存在意義は決して軽くない（注9）。大宮が漏らす不平不満は、一族を繁栄に導くための叱咤として響いたにちがいない。

弘徽殿の女御は、頭中将の正室（右大臣の四の君）腹の娘で、かつて権勢を競っていた左右大臣家が藤氏として一体化する意志を一身に担わされた存在（注10）であり、故左大臣の養女として入内したが、立后は実現しなかった。その無念は、頭中将が雲居の雁の今上帝入内を目指す執念につながる。「廷臣の家」（注11）を自負しつつも、弘徽殿の女御の敗北は、その後の左大臣一家に影響を及ぼしたようである。

光源氏と葵の上の結婚には、後見のない光源氏が左大臣という有力な後ろ盾を得る、重要な意味があった。匂宮は光源氏のように切迫した状況になく、縁談は将来の立坊に備えた保証にすぎなかった。匂宮の立坊については、匂兵部卿巻で次期東宮と目されていた兄二の宮が、蜻蛉巻では式部卿となっており、判然としない。匂兵部卿巻の記述を重視すれば、東宮（一の宮）↓二の宮↓匂宮という順の立坊予定となる。二の宮と匂宮のどちらが東宮に立とうとも、現政権の骨格は何ら揺るがないかもしれない（注12）。しかし、夕霧にとっては大問題だ。二の宮にはすでに次女を嫁がせている。匂宮が立坊するのならば、さらに手を打つ必要があった。夕霧の後宮政策の成果は、実はまだ道半ばなのである。

総角・宿木巻で、明石の中宮によって今上帝の讓位がほのめかされ（宿木⑤三八一）、東宮候補として匂宮の立場が強

調され始める。明石の中宮の影に隠れがちで、今上帝の真意が測りがたいことじたいが、今上帝の意志なのか。今上帝の外戚であった髭黒大臣もすでに亡いことから、今上帝は明石の中宮の兄夕霧を頼り、皇子たちに次々と婚姻関係を結ばせているのかもしれない（注13）。あるいは、今上帝が夕霧体制に歯止めをかけたかと思っているのであれば、次期東宮が夕霧に婿取られた二の宮から匂宮にすり替えられるのも、朱雀皇統の血を引く薫に鍾愛の女二の宮を降嫁させることにごだわるのも、明石の中宮・夕霧連合に対する今上帝の反逆として意味づけられるのだろうか（注14）。それとも、今上帝も明石の中宮も、夕霧も、兄弟二人による連続の皇位継承を望んでいるのか（注15）。確かなことは、匂宮・薫をめぐる、王権に絡んだ目論見がひそかに息づいていることである。

匂宮の立場・即位が本当に実現するかはわからない。物語にはあくまでも、その可能性がしばしば予見されているだけなのだから（注16）。今上帝の譲位問題に加え、宇治十帖後半になるとしだいに病気がちになる明石の中宮の健康問題も不安で、匂宮を守ってきた王権は、かすかに揺らぎつつある。となれば、明石の中宮と緊密な連携を維持してきた夕霧の政治的繁栄も、案外に脆弱とも言える。それだけに、明石の中宮も夕霧もこの良縁に執着したのである。

三条殿腹の大君を、春宮に参らせたまへるよりも、この御事をば、ことに思ひおきてきこえたまへるも、宮の御おはえありさまからなめり。
（宿木⑤四二〇）

夕霧は政治生命を賭して、匂宮と六の君の結婚に奔走していたのであった。しかし、後宮政策に熱心なのは、夕霧だけではない。左大臣の無念や大宮の不満は、紅梅大納言にまで引き継がれていよう。兄柏木の死去のため、次男であった紅梅大納言が、藤家を継承している。紅梅大納言も、前妻腹の大君を東宮に入内させていた。「春日の神の御ことわり」がもし実現すれば、故大臣（父頭中將）の弘徽殿の女御の立后かなわなかった心痛を慰めることができると思う。大君の立后を期待する叙述からは、先の大宮の不満が呼び起こされるようである。

例の、かくかしづきたまふ聞こえありて、次々に従ひつつ聞こえたまふ人多く、内裏、春宮より御気色あれど、内裏には中宮おはします、いかばかりの人かはかの御けはひに並びきこえむ、さりとて、思ひ劣り卑下せんもかひなかる

べし、春宮には、右大臣殿の並ぶ人なげにてさぶらひたまへばきしろひにくけれど、さのみ言ひてやは、人にまさらむと思ふ女子を宮仕に思ひ絶えては、何の本意かはあらむ、と思したちて、参らせたまつりたまふ。(中略)春日の神の御ことわりも、わが世にやもし出で来て、故大臣の、院の女御の御事を胸いたく思してやみにし慰めのこともあらなむと心の中に祈りて、参らせたまつりたまひつ。

(紅梅⑤四一〜四二)

紅梅大納言は、明石の中宮の威勢に気が引けて、大君を今上帝ではなく東宮に入内させたという。玉鬘も、「中宮のいよいよ並びなくのみなりまさりたまふ御けはひにおされて」(竹河⑤六一)、今上帝に大君を参入させることを断念した。匂宮三帖のこうした語り方は、明石の中宮や夕霧の威光、権力に対する嫉妬や不満、光源氏一族の栄華の背後で抑圧される者たちがいることを明らかにする。女二の宮の母藤壺の女御も、明石の中宮に「庄されたたまつりぬる宿世」(宿木⑤三七三)を嘆きながら死去した。宇治の物語における明石の中宮が、その寛容さとは裏腹に、実は「抑圧者」の役割を負っていることは重要だ(注17)。東宮に入内した紅梅大納言の大君が後に立つことは、夕霧の大君が寵愛を専らにしている(匂兵部卿⑤十九)。紅梅大納言家や髭黒・玉鬘家の巻き返しの可能性は、明石の中宮の「御けはひ」や夕霧一族の権勢によって断たれてしまう。

もう一人、左大臣家の血統をひそかに受け継ぐのは、柏木の罪の子薫である。まさに「潜在藤家」のように。薫は同時に、女三の宮を通して朱雀院の血を引く。今上帝が薫を重んじるのも、「母方の御方さまの御心寄せ深」(匂兵部卿⑤二五)のためであった。今上帝は、女二の宮の婿として薫以外の候補を考えていない。婿に立候補して退けられたのが紅梅大納言であり、薫に対する今上帝の厚遇に激怒していることも、藤家の表裏する直系を物語っているようで興味深い。この沙汰は、ある意味では夕霧体制への牽制とも取られようし(注18)、今上帝と薫の「共同統治体制」への布石ともなる(注19)。薫の「潜在藤家」性は、朱雀院の孫、今上帝の婿という表層の社会的立場によって希薄化されている。

では、あの大宮の正直な不平不満が宇治十帖にまで反響しているとしたら、曾孫にあたる六の君こそがそれを解消できないのか。葵の上を母とする夕霧も、二世源氏でありながら撰閥家的な権門であり、藤家的性格も濃い。しかし、脇役六

の君にその任は重すぎるだろうか。大宮の不満を晴らすのは、彼女が養育した夕霧と雲居の雁の間に生まれた姫君がふさわしいのかもしれない。東宮に入内した長女は、宿木巻の記述に従えば、雲居の雁腹である（注20）。しかし、この大君にも、六の君にも皇子が誕生したとは語られないまま、物語は閉じられる。

明石の中宮は、懸案の匂宮と六の君の結婚に安堵したように、三日夜の儀の当日から病み始める。慢性的に病づく明石の中宮に取り憑いた「御邪氣」を、夕霧は「恐ろしきわざなりや」（浮舟⑥一七二）と怖れ、女一宮も執拗な「御物の怪」（手習⑥三三三）に悩まされて、それを調伏した横川の僧都に聞いた「御物の怪の執念きこと」（手習⑥三四五）に、明石の中宮は怯えている（注21）。この臆病さは何か。都の頂点に君臨する者の権力的な傲慢さが、その背景にあるのではないか。寡黙になった明石の中宮は、浮舟に耽溺する匂宮を、今度は自身の体調不良によって奪還するしかなかった。無理矢理に押し進めた六の君の結婚が正しかったのかどうかは、鈍感な明石の中宮にも夕霧にもわからないのである。

しかし、「抑圧者」明石の中宮自身には、何ら悪意はない。明石の中宮の発言は常に、匂宮の母親としての責任と慈愛からである（注22）。優しい明石の中宮は、六の君だけに肩入れして支援するのではなく、中の君の出産に際しては、今上帝の賛同を得て産養を主催し、中の君に匂宮の第一皇子の母として公的な認知を獲得させるといふ寛容さなのであった。

八の宮家再興の鍵をにぎる中の君は、その後の物語の女主人公とはならない。正編の女主人公のように「家の遺志」を果たそうとする女は、女主人公になりえないのである（注23）。六の君も同じである。皇位継承の行く方も、立後の悲願も重要ではない。明石の中宮は、善意から浮舟の生存を薫に知らせ、匂宮には内緒にする。匂宮への情報漏洩を心配する薫に、「大宮」と呼称される明石の中宮は「いともの恐ろしかりし夜のことにて、耳もとどめざりしことにこそ。宮はいかでか聞きたまはむ」（手習⑥三六七）と答え、聞かなかったふりをする。耳を閉ざした真似をし、匂宮に秘密をもつ明石の中宮はもう、以前の威厳と自信に満ちたその人ではないのかもしれない。明石の中宮その人の変容は、正編における物語世界の価値観が崩壊していく結末を物語っているのである（注24）。

注記

- (1) 拙稿「『源氏物語』今上女二の宮試論—浮舟物語における〈装置〉として—」(『日本文学』第五〇巻第八号、二〇〇一年八月)。
- (2) 三田村雅子「第三部発端の構造—〈語り〉の多層性と姉妹物語—」(『源氏物語 感覚の論理』有精堂、一九九六年)、神野藤昭夫「紅梅卷の機能と物語の構造—『源氏物語』宇治の物語論のための断章—」(『源氏物語とその前後』桜楓社、一九八五年)。
- (3) 室伏信助「続編の物語の胎動—匂宮・紅梅・竹河の世界—」(新大系本『源氏物語 第四卷』岩波書店、一九九六年)。
- (4) 拙稿「明石の中宮の言葉と身体—〈いさめ〉から〈病〉へ—」(『中古文学』第六十九号、二〇〇二年五月)。また、三角洋一「明石の中宮を通して宇治十帖を読む(上)(下)」(『むらさき』第四十二・四十三輯、二〇〇五年十二月・二〇〇六年十二月)。
- (5) 「さばかりいかでと思したる六の君の御事を思しよらぬに、なま恨めしと思ひきこえたまふべかめり」(総角⑤二九〇)、「大殿の六の君を思し入れぬこと、なま恨めしげに大臣も思したりけり」(椎本⑤二二五)とあった。
- (6) 小穴規矩子「源氏物語第三部の創造」(『国語国文』第二十七巻第四号、一九五八年四月)。
- (7) 新山春道「うるはし」(『源氏物語事典』大和書房、二〇〇二年)など。
- (8) 女郎花はむしろ落葉の宮物語に位置づけられる花であることは、鈴木裕子「苦悩する〈母〉—娘の人生を所有する母」(『源氏物語を〈母と子〉から読み解く』角川書店、二〇〇五年)。
- (9) 土居奈生子「『源氏物語』左大臣の妻〈大宮〉について」(『源氏物語と帝』森話社、二〇〇四年)。
- (10) 秋山虔「もう一人の弘徽殿女御をめぐる」(『武蔵野文学』第四十八集、二〇〇〇年十一月)。
- (11) 日向一雅「桐壺帝と大臣家の物語」(『源氏物語の準拠と話型』至文堂、一九九九年)。
- (12) 大朝雄二「匂宮論のための覚え書き」(『源氏物語の探究 第二輯』風間書房、一九七六年)。
- (13) 湯浅幸代「薫の孤独—匂宮三帖に見る人々と王権—」(『人物で読む源氏物語／薫』勉誠出版、二〇〇六年)。
- (14) 縄野邦雄「東宮候補としての匂宮」(『人物で読む源氏物語／匂宮・八宮』勉誠出版、二〇〇六年)。

- (15) 辻和良「明石中宮と『皇太弟』問題——『源氏幻想』の到達点——」(『源氏物語 重層する歴史の諸相』竹林舎、二〇〇六年)。
- (16) 助川幸逸郎「匂宮の社会的地位と語りの戦略——(朱雀王統)と薫・その1——」(『物語研究』第四号、二〇〇四年三月)は、その実現の可能性を否定する。
- (17) 岡部明日香「竹河巻の『嫉妬する中宮』像の形成——正編及び宇治十帖との関係性——」(『源氏物語の鑑賞と基礎知識／匂兵部卿・紅梅・竹河』至文堂、二〇〇四年十二月)。
- (18) 注14・縄野論文。
- (19) 注16・助川論文。
- (20) 夕霧巻では、大君は藤典侍腹となっているが、今は問わない。
- (21) 三田村雅子「もののけという〈感覚〉——身体の違和から——」(フェリスカルチャーシリーズ①『源氏物語の魅力を探る』翰林書房、二〇〇二年)。
- (22) 注4・拙稿、注15・辻論文。
- (23) 吉井美弥子「宇治を離れる中の君——早蕨・宿木巻——」(『源氏物語講座 第四巻』勉誠社、一九九二年)。
- (24) 鈴木裕子「〈母〉のパラダイム・『源氏物語』明石の中宮を中心に」(『駒澤日本文化』第一号、二〇〇七年十二月)。
- 附記 本文の引用は、小学館・新編日本古典文学全集本による。

(本学非常勤講師)